

若き「女医」、金高ますゑの闘い、 五泉・葛塚診療所で働く



『ザボンよ、たわわに実れ』（花伝社 2023 年 11 月刊）は、金高満すゑ（1908～1997）を描くノンフィクション。

貧しい人々に、医療を！民医連（全日本民主医療機関連合会）の礎となった、若き「女医」のたたかい。

「病人はいないか、子どもは元気か」 1930 年代、戦前、戦中の貧困と保険制度のない時代に広く人々に医療を提供し、日本の医療制度の改善を求めた無産者診療所（現在の民医連）の医師として一生を捧げる。（『毎日新聞』2024-01-13「今週の本棚」）

治安維持法の時代に誰もが医療を受けられる

満すゑは 1931（昭和6）年の卒業試験の最中、特高警察に検挙されました。学生仲間がかばってくれて試験を受けていたのですが、ついに捕まってしまう、卒業できなくなりました。

1933（昭和8）年8月、満すゑ 27歳のとき、治安維持法違反で検挙され、翌年、5月に起訴されます。満すゑは市ヶ谷刑務所に2年半、囚人として収容されました。出所したときは、すっかり衰弱して、肋骨がゴツゴツ浮き出て、洗濯板みたいな身体になっていたそうです。

日本国憲法 第25条

第1項 すべて国民は、健康で文化的な最低限度の生活を営む権利を有する。
第2項 国は、すべての生活部面につ

それでも満すゑは1939年4月、女子医専に復学し、翌1940年3月、31歳のとき卒業することができました。

そして新潟に行き、五泉診療所そして葛塚診療所で医師として働くようになったのです。（無産診療所は 1941年3月、弾圧で閉鎖）

戦後は、民医連の病院のいくつかで働き、1997年12月、89歳で死去。その一生を追った労作です。

（「福岡県弁護士会の読書」2024 年 9 月 25 日）

いて、社会福祉、社会保障及び公衆衛生の向上及び増進に努めなければならない。